
これこそリアルなハンター生活。

がらな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これこそリアルなハンター生活。

【Nコード】

N5883Z

【作者名】

がらな

【あらすじ】

主人公はゲームの中にいた。そう、ここはとあるオンラインゲーム世界での出来事だ。そんな主人公ミロクはそのゲームのプレイヤー啓介が帰ってくるまで動くことができない。啓介が帰ってきて、ロクインするとミロクはハンティングに出かけることができるのだ。あらゆるモンスターを倒していき、個人のレベルを上げて、もっと強いモンスターに挑戦していくゲームだ。そのゲームの中で行われる戦闘をぜひお楽しみに！果たしてミロクの運命は…?!

ハンターさんの心得（前書き）

はじめまして！

今回から新たな小説を書いていこうと思います！

某ゲームに近い気もしますが、オリジナル要素も満載なので楽しんで読んで頂ければと思います！よろしくお願いします！

ハンターさんの心得

ここは、とあるオンラインゲームの中の世界。

このオンラインゲームは、とても有名なものであり、テレビのCMなどでも宣伝されて、全国のみんなが知っているオンラインゲームだ。

その他に有名なのは、メイ ルストーリーやドル ーガの塔などがある。

このゲームは、たくさんのもンスターを倒していきながら、そのもンスターから入手できる素材を使い、装備（防具や武器など）を完成させていき、レベルの高いもンスターに挑戦していくというゲームだ。

一応具体的に解説したつもりだが、わからないのであれば、いい例えがある。

みんな、聞いたことがあると思うが、モン ンというものだ。

それに並ぶくらいの有名度を誇るこのゲームの中に主人公はいた。

「ううー、暇すぎるうー、早く帰ってきてくれよおおー」

そう、主人公はゲームの中にいるのだ。

そして、その主人公が待っているのは、そのゲームのプレイヤーで

ある山本 啓介だ。

まあ、いわゆる親みたいなものだ。中学2年生の啓介は完璧な厨二病だ。厨二病の代表者だ。

そいつが学校から帰ってきて、このゲームのログインしない限り、主人公さんはベッドから動けないという規制がかけられている。

普段ならベッドで寝ているのが普通だが、今日は何故か目が覚めてしまい、暇という名の敵に襲われ続けていたのだ。

その暇に耐えながらも啓介の帰りを待つ。

そして、2時間後

「たあだいまあー」

啓介様のお帰りだ。

家には啓介以外はいなく親は皆仕事兄弟はいない。
ということから啓介は家でいつも一人だ。

帰ってきて、手を洗うより先にパソコンのスイッチを入れる。

パソコンを起動するとまずログイン画面まで行く。そこまで行く手
つきは慣れたもので凄かった。

そして、ログインした。

「うお？ おっしゃ！動けるぞおー！帰ってきたのか！やったぜえ
えええええー！！」

そうして、主人公のゲームが始まった。

主人公の名前はミロク。

ミロクは、このゲームの中で上級者扱いされてる結構いい腕のやつ
だ。

そしてログインが完了し、ミロクは集会所へ出た。ここは『フェイ
ルの村』と言われる村だ。ミロク達はここの村でハンター生活を過
ごしている。

ミロクがログインしました。

「オオー、ミロクじゃーん！遅かったなあー！」

「ああ、悪いな、啓介が帰って来んの遅くてよお」

「そっかそっか、それは仕方ないな！」

ログインするや否や近づいてきたのは、いつも共にクエストをクリアして行っているハンターさんだ。
そいつの名前は「たかやん」という。

たかやんはミロクと同じくらいハンティングがうまくて、常に一緒に行動している。

基本は二人で何でもこなして行ってしまう。

そんな二人は、今日もハンティングに行く。

啓介の一日のゲームのプレイ時間は約8時間程度。

周りのプレイヤーからすると長く感じるが、啓介自身は少ないと思っ
っているらしい。

素晴らしいゲーマーだ。一度ハマったゲームはあまり飽きないらしく、長い間やっ
ていられる体質だそうだ。

今回はハンティングに行かず、このゲームについて詳しく説明していき
たいと思う。

まず、ハンティングに行くためには、クエストを受注しなければなら
ない。

クエストにはレベルがあり、下級、上級、アドバンス級、と3段階
に分けられている。

今、ミロク達は上級レベルのモンスターを倒してきている。

アドバンス級はほんとうに強いモンスターばかりなので、気をつけ
たほうがいいとのことだ。

ミロクたちも一度挑戦したが、全く歯が立たず、クエストリタイア
したという。

そして、そのクエストを受注するための場所が集会所という。

集会所では全国のみんなが集まっておりたくさんのハンターが生息している。

クエストは集会所にいる、受付嬢さんにクエスト一覧を見させてもらい、その中から選びクエストへ出発する。

クエスト一覧には、たくさんの人から依頼されたクエストがこんもりと書かれている。

クエストの依頼は村長に頼めば誰でも依頼することができる。

そのかわり、クエストをこなしてくれたハンターには報酬金を払わなくてはならない。

ハンターは、クエストをクリアすると、報酬金とその倒したモンスターの素材や鉱物などがもらえる。

ハンター側からすると、村の平和を守るというのもあるが、その報酬目当てなのが多い。

実際ミロク達もその報酬を目当てにハンティングしている。

その報酬で手に入った素材を使って武器などを作っていくわけだから、報酬はかなり重要なものだ。

もちろん、ハンティングに行ってる最中にゲットしたものはそのままのそのゲットした人のものになる。

次に、ハンターたちの職業について説明しよう。

職業とはハンターたちが行う攻撃手段の傾向だ。

まず一つ目は「ソルジャー」だ。

ソルジャーとは主に剣を使い敵と戦う。

そのソルジャーが使える武器は、大剣、片手剣、短剣、太刀、槍、などがある。

それぞれの武器によってメリット・デメリットがあるのでそれを駆使しながら戦うのがソルジャーだ。

そしてもうひとつは「ガンナー」だ。

ガンナーは、簡単に言うと鉄砲のようなものを使い攻撃する、遠距

離攻撃がメインの職業だ。

そのガンナーが使えるのは、ボウガン、ライフル、二丁拳銃、弓、などがある。

ガンナーは弾などを所持していかなければならないので、結構からだが重くなり、若干動きが鈍ってしまいが、それをカバーしながら戦うのがガンナーだ。

そして最後。

もう一つは「マジシャン」だ。

マジシャンは全体的に少なく、マジシャンをしている人はあまり見かけない。

マジシャンの主な攻撃方法は、魔法だ。

だが、マジシャンは殆どといって良いくらい攻撃はしない。

基本、マジシャンは周りの皆んなの補助に付いている。

体力を回復させたり、攻撃力を上げたり、モンスターの動きを制御したりなどと役に立つことしかない。

アドバンス級のモンスターを倒しに行く時には一人はいたほうが心強いだろう。

これで職業についての説明は終わりだ。

あとは、これから進むに連れてわかってくると思うから、説明は不要だ。

「ふむふむ、なるほどね、この初心者ガイド、結構詳しく書いてあるわ。」

ミロクがそうたかやんに話しかけた。

するとたかやんはビクツと体を震わせ、こういった。

「うえ?!なんか言った?」

全く聞いていなかったようだ。

聞いていなかったと言うより、魂が抜けていたようだ。

「いや、この初心者ガイドすげえなあと思ってさ。」

ミロクがきちんともう一度説明してあげると、たかやんはこういった

「ああー！それね！俺も最初読んだよ、かなり詳しく書いてあってわかりやすかったわ」

ミロクはたかやんも読んだのかと感心し、その初心者ガイドを棚にしまった。

これからハンティングに出かけるため、今は準備をしていたところだった。

「とりあえず、何倒しに行くか決めようぜ」

「おれさ、ライムリアの武器作りたいんだよね、つきあってくれな
い？」

「あ、ライムリアか、いいよー」

というわけで、これからミロク達は上級レベルのモンスターの【雷神龍 ライムリア】を倒しに行くことになった。

ハンターさんの心得（後書き）

感想評価お願いします！

ライムリアとの死闘 前編

これからミロクとたかやんの死闘が始まる。

その為の準備を行う。

まずは、装備を考えなければならない。

今から倒しに行くのは【雷神龍 ライムリア】だ。

相手は雷属性なので、雷耐性値が強い防具で挑む必要がある。

そして、相手の弱点は火属性だ。

それにより、火属性攻撃が可能な武器を装備するのがいいだろう。

「うーん、どれでいこうかなあー。俺はこの大剣でいこうかな！」

そういいながらミロクが手にしたものは、真っ赤に染まった、あからさまにこれは火属性だとわかるような武器だった。

その大剣はとても大きく、更にとても重くと不便な点ばかりだが、攻撃力の高さではずば抜けて大きいものだった。

ミロクはその大剣を担いで集会所へと向かった。

その頃たかやんは

「火属性だろー？多分ミロクはあの大剣で来ると思うんだよなあー。だったら俺は二丁拳銃かな。なんてったって向こうは動きが遅いつていうデメリットがあるわけだから、こっちは早く動けたほうがいいに決まってるよな！よし！」

と、たかやんは独り言を呟きながら、あ、いや、叫びながら装備を着々と決めていた。

そして二丁拳銃を腰のポケットにしまい、集会所へと向かった。

そして二人は集会所で合流した。

「ああー、やっぱりミロク大剣できやがったw」

「な、なんだよ。変えてくるか？」

「いや、俺はそう来るだろうなと思って相性考えて装備してきたんだ！」

「おま、すげえなwさすがたかやんだ！」

たかやんは自分の予想が当たったことに嬉しげな顔をしてアイテムの調達を終えた。

回復薬、爆弾、畏、食料、その他個人に必要なものを、を持ち、クエストへ出発した。

クエストの現場は「無人島」だ。

ここには至る所に雑魚モンスターがうようよしている為、大型モンスターだけに集中して攻撃することが若干困難な場所でもあるため、ここでのハンティングは上級として扱われている。

そして二人は無人島に到着した。

「ハアー、ここ来るの久々だなあー！」

「おい、たかやん、あまり浮かれんなよ？ライムリア結構強いからな？」

「わあってるよ、んな事！早速行こうぜ！」

二人は無人島の中を彷徨いながら、ライムリアを探していた。すると、雑魚モンスターが急に攻撃してきた。

「痛っ」

傷は切り傷程度だったが、まあまあ深く刺さっていた。

「おい、お前、いきなり俺に噛み付くとはいい度胸じゃねえか……」

ミロクは噛まれたことに対して苛立ちを感じた。

そして斬りつけようと、大剣を下ろし、大きく構えた。

その時、たかやんが拳銃でバン！っと一発かました。

するとその銃弾はモンスターに直撃し、即死だった。

「うおい！俺が思っきりたたつ切るところだっただろ！」

「ミロクの武器は隙が大きいからこっちで撃ったほうが早いと思っただ。しかも、今はソムイルを倒してる場合じゃないだろ？さっさとライムリア倒そうぜ！」

ミロクはそうだなと頷きそのまま探しに向かおうとした。するとその時、後ろから大きな音が聞こえた。

「ん？なんだいまの音。」

「ライムリアさんのご登場だ！」

そう、ライムリアが空から舞い降りてきたのだ。

ライムリアは、ドラゴン。空を自由に飛ぶことができる。

どんなモンスターかはご想像にお任せします

ライムリアは羽を使いゆっくりと着地した。

だがしかし、ライムリアはまだ、ミロクたちの存在に気づいていない。

「お、まだ気付いてないようだな。」

「ゆっくり近づいて、溜め切りしてこい！」
「任せな」

ゆっくりゆっくりとライムリアに近づいていき、真横にたった所で大剣を大きく構えた。
が、その時、気づかれた。

「グ…グオオオオオオオオオ！！！」

ライムリアは大きく咆哮した。

そしてミロクは剣を思いつき振りかざした。

「うるせええええ！！！！！」

その大剣はライムリアの胴体を斬りつけた。

「よっしゃ行くぞおお！！！」

二人の死闘が始まった。

たかやんは、すごいスピードで、走りながら性格に顔面を打ち抜いていた。

ミロクは大きな大剣をブンブン振り回し、ライムリアを斬りまくっていた。

するとライムリアはちょっとだけ飛び、口から雷球をこちらに吐きつけて来た。

その雷球はミロクに直撃した。

「ぐあぁっ！！！」

ミロクは感電してしまい少しの間体が言うことを効かなくなった。

その隙を逃さず、ライムリアはミロクを抑えつけ、大きな口でミロクを噛み付けた。

「うあああああ！！！！」

ミロクは叫ぶことしかできなかった。

するとたかやんは2つの拳銃をクロスさせて力を溜め込んだ。

そして両方の銃で一気に撃った。

「離れるオー！！！」

その銃弾はライムリアの顔面に直撃した。

「ゲオオオオ！！！」

ライムリアの大きな角が砕け散った。

それと同時にライムリアはよろけた、その隙を逃さずにミロクはすぐさまその場を離れた。

「助かったぜ……！」

「ああ、早く回復薬を飲め！すぐに来るぞ！」
「わかった。」

ミロクは回復薬を飲んだ。

すると傷がみるみる修復していく。

「元気百倍！ミロークマン！」

「おい、いいからさっさと攻撃に参加しろ！」

ミロクがつまらんボケを繰り返しているときに、たかやんはたくさ

んの攻撃を受け、からだがボロつてきていた。

「おお、ワリイ、よし、行くぜえ！」

そして、ミロクが戦いに参戦し、攻撃を開始した。

ミロクの大剣はライムリアによく効いていたようだ。だんだんライムリアも弱ってきている。

「よし、ミロク！こっちに落とし穴仕掛けとくぞ！」

「おっけ！」

そして落とし穴を仕掛け終わるのを見計らって、ミロクは落とし穴のある方へライムリアを誘導した。

ライムリアは見事に落とし穴にかかった。

その場で何もできず暴れているラムイリアの顔面の部分に二人は大きな爆弾を設置した。

「ようし、たかやん！撃てええ！！！」

たかやんは全力で溜めた銃を爆弾めがけて撃った。

すると爆弾は大きな音をたて爆発し、ライムリアの顔面はボロボロになった。

角が2本とも折れてしまったライムリアは、とてもかっこ悪かった。

するとライムリアが怒ってしまい、大きく咆哮をした。

「ぐああー！うるせえーなあー！」

するとライムリアは、空の方へ顔を向けて、また大きく咆哮した。

そうすると空はがだんだんと暗くなっていくのが分かった。

そして…

「グオオオオオオ!!!!」

ズドン……バアアーン!!!!

空から雷が落ちてきた。

そしてその雷がたかやんとミロクに命中した。

『うああああ!!!!!!』

二人は声を合わせ倒れてしまった。

いくら雷耐性の高い防具であろうと、雷をモロ受けてしまったら、大ダメージだ。

更に二人は感電してしまい全くからだ動かなくなってしまった。
果たして二人の運命は……?!

ライムリアとの死闘 前編（後書き）

感想評価お願いします！

お気に入り登録（ ・ ・ ・ ）ノヨロシク！

ライムリアとの死闘 後編

「くっ…からだ…動かねえ…!!」

雷をモロ食らってしまった二人は、からだが麻痺していて全く言うことを効かない状態に陥ってしまった。ゆっくりとライムリアがこちらへと寄ってくる。そして、鋭利な爪でミロクのからだをおもいきり引っ掻いた。

「ぐああああ!!」

体が動かないため抵抗できずやられるがままに攻撃されていた。ミロクは、何度も何度も引っ掻かれていて、からだは傷だらけだった。

「ぐっ…!!うああああ!!やめろおお!!!!」

それを横目で見つめるしかないたかやんはある意味ミロクより辛かったはずだ。

自分の仲間がズタズタにされてるのにそれを見守ることしかできない。

「ちくしょう…!動けよっ…!!!!」

いくら頑張ってもやはりからだは動かなかった。するとライムリアが今度はたかやんの方へよってきた。そして今度はたかやんに攻撃を始めた。

「……!!ぐあああああ!!!!死ぬっ!死ぬうう!!!!」
「たかやあああん!!!!ちくしょう…ちくしょおお!!!!」

「光り射す閃光よ、今ここに新たな静寂を産み出せ。光の制裁」

「グオオオ?」

ライムリアの動きが止まった。

そのライムリアのからだには無数の光の矢が刺さっており、関節を止められていた。

「雷鳴に轟く稲妻よ、今ここに新たな激戦を打ち破れ。緑の宝札」

ミロクとたかやんのからだにあつた無数の傷がみるみるうちに回復されていく。

そして、麻痺も溶けた。

体が自由に動く。

「大丈夫ですか?怪我の方は完璧には治りませんので、無理はしないで下さい。」

「あ、ありがとうございます!あのオ、どちらさまですか?」

「ほら、よそ見をしてはいけません。ライムリアが動き出しますよ?」

謎の男がそう言うと、ライムリアは大きく咆哮をした。

そして、ライムリアは口から雷球を飛ばした。

その雷球は謎の男の方へと飛んでいった。

「光り輝く天使よ、今ここに我の身を守りし一枚の壁を産み出せ。」

「ようし！早速剥ぎ取りだ！」

二人は持参してる剥ぎ取りナイフでライムリアの素材を剥ぎ取った。そして、そのまま集会所へと戻った。

「はい、こちら報酬金の¥5,400です！」

「ありがとうございます。」

お金もいっぱいゲットしたし、今回は報酬が良かったのでミロクは満足そうな顔をしていた。

「あ、そういえば、さっきの人だれだったんだろう？」

「ああー、後で見つけたら礼を言わなきゃね」

と、二人で話しているときに、その人はやってきた。

「やあ、二人とも。ライムリアの討伐お疲れ様。」

「あ、さっきの！」

「噂をすれば…だな」

その男はさっきまで防具のせいであまり良く顔は見えなかったが、今は顔がよく見える。

そして、ものすっごいイケメンだ。

「あ、先程はありがとうございました！」

二人は深々と頭を下げ礼を言った。

「いやいや、ただ通りすがっただけですから」

嘘へたくそっ！通りすがったって、無人島までなにしに来とんねん！

「あの、もし宜しければ、お名前を…」

「あ、私は まいける と申します。」

「まいけるさんですか、これからも色々お願いします」

「はい！あと、こちらから一つお願いがあるのですが…」

「なんででしょう？」

「あの、あなた達と共に行動させていただきませんか？いわゆるパーティーを一緒に組みたいのです。」

なんと、まいけるさんから、パーティーに入りたいという申請がきた。

こっちが頑張って誘おうと思っていたところだったのですごく嬉しかった。

「ほ、ほんとうですか?!」

「是非、よろしくお願いします!」

「いいんですか!?!」

「ええ、もちろん!」

「ありがとうございます!」

こうして、一人仲間が増えた。

「ちなみに、もうお分かりでしょうが、私は”マジシャン”です。」

「やはりそうでしたか!すぐく役に立ちました!ありがとうございます!ありがとうございました!」

これで、ソルジャー、ガンナー、マジシャンが出揃った。

これからもミロクたちのハンター生活は続く。

ライムリアとの死闘 後編（後書き）

2話に渡るライムリアとの戦いが終わりました！

感想評価お願いします！

お気に入り登録（ ・ ・ ・ ）ノヨロシク！

ハンターさんの討伐クエスト

ライムリアの討伐を終えた二人は、途中死にかけていた所を救ってくれた謎の男「まいける」との再会を果たし、パーティーへ入れようという誘いをだそうと計画していた。だがしかし、なんとまいけるさんからパーティーへ入りたいという申請があった。もちろん迷うことなく二人はパーティーへと入れた。まいけるの職業はマジシヤンだった。これで、ソルジャー、ガンナー、マジシヤンの全種類を使いこなせるパーティーとなった。

「あ、ちなみに、俺はソルジャーも行けるよ」

そう、たかやんはガンナー専門ではなく、ソルジャーも全然行けるのであった。

ミロクはソルジャー専門、まいけるはマジシヤン専門、たかやんは、ソルジャーとガンナー。という職業になっている。

そして3人になったミロク達はアドバンス級をめざすために日々修行を続けていた。

「よし、次は何狩りに行く？」

「うーん、そうだなあ、なんか足りてない素材とか無いの？」

「あ、あの、私足りてない素材あるんです。」

「まいけるさん、何が足りてないんですか？」

「あ、えっと、メラライト鉱石なんですけど……」

「鉱石ですか！しかも、メラレイト！？あんなの余裕で手に入るじゃないですか！」

「昨日使っちゃったんですよ、武器の強化にね。だから足りなくて…」

「あ、いいっすよ、行きましようよ。フェイルの森行けば採掘できるっすよね」

「そうだね、でも、一応環境見とかなないと。大型モンスターいるかも知れないからさ。」

「ですね！見てみましょうか！」

3人はクエスト一覧の横に書いてあるフェイルの森の環境状態をチエックした。

するとそこには

「狩猟環境：ややおだやか 天気：曇りっぽい晴れ 大型モンスター：サリアコイル」

と書いてあった。

「天気：曇りっぽい晴れってなんやねん、っぽいってなんやねん、そして何故天気っていう項目を作ったのか、そんな事より小型モンスターのほうが重要だろうに。」

ミロクがクールにツッコミを入れた。

もう、ツッコミに慣れていて無駄なテンションの高いツッコミとは

違い、クールなツツコミだった。

「つつか、サリアコイルかよー！なかなか手強いじゃん！」

「そうですね、でも、サリアくらいなら余裕で行けますでしょ。ついでに討伐しちゃいましょうよ。」

「分かりました！じゃ、ミロク！装備変更し終えたらここで集合な
！」

「あいよ」

たかやんが指揮をとってクエストに向かうことになった。
そして3人はそれぞれ装備を揃えたあと、集会所で集合した。

「ヨオし、みんな集まったな！しゅっぱーつするぞ？」

「いいよお」

「あ、待って下さい！」

「まいけるさん、どうしました？」

「ピッケル忘れましたw」

「なんでそんな重要なものをw」

「取りに行ってきます。」

「はぁーい」

まいけるさんが行きたいと言った探掘に欠かせないものを本人が忘れるのはどうかしてるだろうと、ミロクはムツすりしていた。

「おそいなあ」

なんとそれから30分たつてもまいけるは姿を表さなかった。またそれから30分が経過。まだ、まいけるは来ない。

「おい、どういふことだよ、なにしてんだよあいつ。」

「さすがに遅すぎるな、なにやってんだらう。」

「さあな。」

「俺らで違うクエスト行こうぜ。」

「そうだな、そうするか。」

ということ二人は、違うクエストへ向かった。

そのクエストは「ギガアルデン」の討伐クエストだった。

ギガアルデンとはアルデンという雑魚モンの親みたいだよつだ。

正直強くないが、ギガアルデンから取れる「騎楼獣の牙」きろうじゅうのきばが足りなくて、討伐クエストに行くことになった。

ギガアルデンには1つだけとても強力な技があり、大きな牙で喉元を噛み砕くという技がある、その技を食らってしまうと死んでしまふと言われている。現に、死んでる人も少なくない。

「まあ、ギガアルデンでも、油断すんなよ。死ぬ可能性だつて低くないんだからな。」

「ああ、わかってる。」

「じゃ行くぞ！」

二人はギガアルデンの討伐へと向かった。

このクエストの狩場はフェイルの森。
比較的狩猟がしやすい狩場だ。

そのおかげで、ギガアルデンをすぐ見つけることが出来た。

「おっと、見つけたぜ！」

今回の装備は、ミロクが短剣、たかやんが太刀を使っていた。
どちらもソルジャーのためすぐに終わりそうだ。

「とりやアー！」

前回大剣だったミロクは短剣にしたためすごく軽く感じ動きが軽やかだった。

そしてすごくスピーディーできれいだった。

「ふっ！はっ！そりゃああ！」

たかやんは、大きな鋭い太刀をギガアルデンに斬りつけていた。
ガンナーじゃなくても、ソルジャーでも、全然強さは変わらないよ
うだ。

いや、むしろソルジャーのほうが得意そうに見える。

ギガアルデンも負けていない。

「グギャアアア!!」

大きな声を出し、アルデンをたくさん呼び出してきた。

「ちくしょう、こいつらメツチャクチャ邪魔だ!」

「俺に任せろ! たかやんはギガアルデンだけに集中してる!」

ミロクはそう言うと、短剣でスパスパとアルデンを倒していった。アルデンはものすごいスピードで数が減っていく。

しかし、それに負けないスピードでアルデンがうようよ湧いてくる。

「コレじゃあいつまでたつてもきりがない! ちくしょお!!」

「頑張ってくれ! こっちはもうソロ終わる!」

ギガアルデンも弱ってきていた。

ギガアルデンの目線の先にはミロクがいた。

ミロクはアルデンを倒していたため、ギガアルデンには気づいていなかった。

ギガアルデンはミロクの喉元に大きな牙を突き刺そうとしていた。

「ミロク!! あぶないっ!!!!」

たかやんがそういったときには、もうすでに噛み付く寸前だった。すると…

ひゅっ!!

ミロクが、急に姿を消した。

「ミ、ミロク…？」

たかやんは嘔み付かれなくてよかったという気持ちと、何処へ言ったかという変な気持ちが入り混ざっていた。

「おい、ミロク！何処だ！ 痛っ！ギガアルデン邪魔だああ！！！」

大きく太刀を振り回す、すると。

「グギヤアアア！！！！！」

ギガアルデンは死んだ。

たかやんは一人でギガアルデンの討伐に成功した。

そのころミロクは

「俺、なんでベッドの上に…？まあ、いいや。寝るか。」

時間を遡ること3分。

リアルワールド
現実世界では…

「啓介ー！ご飯よー！」

「はぁーい 今ギガアルデンの途中なんだけどなあ…。まあ、あとも来れるからいつか！ぶちっちゃえw」

「ほら啓介ー！ご飯冷めちゃうわよ！あ、ラーメンだった。麺のびる

わよー！」

「はいはい！今行くからー！」

ということだ。

啓介が突然電源を消したため、ミロクが急に消えたのだ。

消えたと言うよりは、ログアウトしたという方が正しいのか。

どちらにせよ、ミロクの安全確保だ。

「今日はもう召し食ったら寝よつと。」

ミロクは、明日まで目をさますことはなかった。

ベッドの上でいびきをかき、疲れをとっているようだ。

「ミロク何処行きやがったんだ？つたく、あした聞いてみるか。今日
日はもう落ち」

たかやんさんがログアウトしました。

ハンターさんの討伐クエスト（後書き）

感想評価お願いします

お気に入り登録（ ・ ・ ・ ）ノヨロシク

ハンターさんの夢

「はっ……はっ……はっ……ちくしょお……」

ミロクは全力ダッシュだった。

ミロクの後ろからは、大きなドラゴンが。

【神轟龍 アクティレス】

4大神の内の一体の龍。

神の放つ咆哮は、大地を轟かせ、天空龍の血を枯らす。

アクティレスの目線の先にはミロクしかいない。

ミロクはアクティレスにターゲットされている。

「……ハア……ハア……ハア……クソ……！何処まで追いかけてきやがるんだ！」

ミロクは逃げる。

だがしかし

ズドン！

ミロクの目の前に、もう一匹の敵が。。。

【極星獣 ベルギウス】

鋭利な牙と鋭い爪で全てを薙ぎ払う。

その偉大なる魂が心を閉ざすとき、漆黒の闇へと葬り去る。

「おいおい、まじかよ……」

ミロクは足が竦んで動けなかった。そして、超大型モンスターに挟まれたミロクは、そのまま2匹の餌食になるしかなかった。

2匹は同時にミロクに噛み付いた。

「う、うわああアアアア！！！！」

バサッ！！！！

「うおお！……ハア……ハア……夢か……。」

まさかの夢オチだ。

ミロクはベッドから跳ねあがった。

だがしかし、ベッドからは出れないシステム。すぐに動けなくなってしまった。

「ったく、また目覚めちまったよ。早く帰ってこないかなあ。」

そう、ミロクは操作主である、啓介の帰りを待たねばならぬのだ。この待っている時間がどれほど苦痛かみんなにはわかるだろうか。なにも出来ずにベッドで横たわったまま啓介の帰りを待つ。きつすぎるといつしか無い。

「たあだいまあー」

今回は早く帰ってきてくれた。

「よっしゃ、早かったじゃねえか啓介ー。」

ミロクのテンションゲージが上がった。

「そういえば今日は3人で狩猟かぁ。腕がなるぜ」

ミロクのテンションゲージがもつと上がった。

「しかも今日は、商売人さんの品物半額デーじゃん」

ミロクのテンションゲージがもつともつと上がった。

「啓介ー！勉強しなさいー！いつまでもゲームばかりやってても、いい仕事に就けないわよー！」

「はい。つたく、しょうがない。今日は我慢して勉強するか。」

ミロクのテンションゲージが0まで下がった。

「なんでだよおおおー！！なんでそうなるんだよおおおー！！おかしいやろおおおー！！」

という訳で、今日はミロクはずっとベッドの上だ。

24時間後までまたなればならない。

24時間後には、狩猟に出れてるはずだ。

その頃、たかやんは

「ミロク、きょうこねえのかなぁ。昨日急に消えてきょうこないって、まさか……。」

たかやんは変な妄想をしてしまっていた。
ミロクが誘拐されたんじゃないかと。

「そんなはずないか。」

たかやんは一人でクエストに向かった。

その頃、まいけるは

「いやあー、昨日悪いことしたなあー、テレビの前通過したら面白い番組やってそのまま釘付けになっちまったんだよなあー。やっちまっちなあー。」

まいけるは、これっぽっちも詫びようとする姿を見せずんブツブツ言っていた。

そしてまいけるは「今日はもうやめるのか、早いなあ」と言いながら消えた。

まいけるさんがログアウトしました。

「はあああー、ジャンプ読み飽きたよおー、暇ダー。」

ミロクはこのまま1日を過ごさなければならなかった。

そして、24時間後

ハンターさんの夢(後書き)

感想評価お願いします

お気に入り登録(・・・)(ノヨロシク

短くてすみません

眠すぎますWWW

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5883z/>

これこそリアルなハンター生活。

2011年12月22日23時53分発行